

書評

テッド・クルーズ著『目覚め拒否』

島田 洋一（福井県立大学名誉教授）

本書は、米議会きっての保守派論客として知られるテッド・クルーズ上院議員（共和党）の新著である。原題を直訳すると、「目覚め拒否—アメリカにおける文化マルクス主義をいかに打破するか」となる（Ted Cruz, *Unwoke: How to Defeat Cultural Marxism in America*, 2023）。

クルーズ氏は、2016年の共和党大統領候補選出予備選でトランプ氏と最後まで激しく争ったが、現在では、最も近いと言ってよいくらいの盟友関係にある。

ちなみに筆者は、2023年5月初旬に拉致被害者家族会、救う会、拉致議連の一員として訪米した際、首都ワシントンの上院議員会館にある同議員のオフィスで面談の機会を得た。

今後、北朝鮮問題で日本の国益を損ない、拉致被害者の無事帰還を危うくしかねない展開となった時、同議員に「日本の立場と重要情報を打ち込んだ」ことが大いに生きてくるものと期待している。発信力がずば抜けているだけに、日本にとっても中核的な盟友たり得る議員である。

さて、今や、ポリティカル・コレクトネス（政治的正しさ。日本ではしばしばポリコレと約される）の悪しき進化形として、アメリカの文化戦争におけるキーワードとなったウォーク（woke、目覚めた）は、「目覚める」を意味するwakeの過去分詞形である。日本で言えば、「意識高い系」が用語として近い。

批判的人種理論（アメリカは人種差別が構造化した社会と規定）、LGBTイデオロギー、経済における「結果の平等」などを、異論を許さぬ形で社会全体に押し付け、定着させようとする政治運動および態度を指す。

クルーズ氏は、今日「ウォーク全体主義者」たちは、「人々への洗脳過程を、読み書きを覚える前の段階から始める」、すなわち初等教育におけるウォーク・イデオロギー注入を「解決策」と見て、「人員配置を巡る戦い」を中心に、戦略的に押し進めているという。

ウォーク教員を増やそうと思えば、大学の教員養成課程を支配せねばならない。そのため近年、大学教育におけるカリキュラムが左翼主導で相当歪められていると、クルーズ氏は注意を喚起する。

キューバから亡命した両親を持つクルーズ氏らしく、アメリカ左翼の手本はカストロ体制だと言う。

「チェ・ゲバラは残忍な怪物だった。ゲバラはしばしば、革命に忠実でないと見なした人々を殺害した。『私の鼻腔は、弾薬と血のツンとくる匂いを味わうべく拡張する。私は本当に殺人が好きなんだと分かった』。彼はそう書いている。…ゲバラは子供を『自由に成型できる粘土』と呼び、幼児教育に力を入れた」

キューバで教員を務めていたクルーズ氏の祖母は、近所から白眼視されるのを承知で、

狂気を装ったという。

子供たちに嘘を教えることは良心に照らしてできない、かといって政権の方針に露骨に反抗すると命が危ない。窮した挙句の「狂人偽装」だった。

日本の政治家には、カストロやゲバラへの憧れを無邪気に口にする人々が、少なからずいる。それでは日米保守議員間の連携は難しいだろう。

クルーズ氏が強調するように、今日、アメリカのウォーク教員らは、子供たちが、「我が国の過去を憎悪し、建国者たちは邪悪な人種差別主義者だと見なすよう」導こうとする。そのテキストとなっているのが、ニューヨーク・タイムズがキャンペーンを始めた「1619年プロジェクト」および様々な普及版パンフレットである。

このプロジェクトは、最初の奴隷船がアフリカから黒人を連れてきた1619年こそが、今日に至るアメリカ社会の構造的原点であり、翌1620年のメイフラワー号到着を特筆大書する白人中心の歴史は、根本的に書き換えられねばならないとの発想に基づくもので、1619年から400周年となる2019年に開始された。

この運動を巡る細かな動きについては、『歴史認識問題研究』第12号所収の「鼎談・世界に広がる自虐史観」(西岡力、島田洋一、江崎道朗)を参照頂きたい。

クルーズ氏は、「抑圧の歴史という一つのレンズのみ」を目に当てて、アメリカの過去は「主としてジェノサイド、レイプ、殺人の歴史だったと描く」ウォーク教育に対して、親や議会がはっきり立ち上がらねばならないと言う。そして自ら実践してきた。

アメリカでは、保守とリベラルのせめぎあいが増激化しており、保守派の勢力が強い州では、初等教育の場で批判的人種理論、トランスジェンダー・イデオロギーなどを教えることを禁じる州法の成立も見られる。

クルーズ氏は、連邦裁判官や各省庁幹部人事に承認権を持つ上院議員の1人として、国政の場で、バイデン大統領が指名した極左人士や民主党提出のウォーク法案を拒けるため奮闘してきた。

本書は、そうした闘いの、現在進行形の記録として、非常に興味深い。